

タイトル	北駕文庫蔵 「道神足無極変化経 巻第四」：影印および解題
著者	徳永，良次；TOKUNAGA, Yoshitsugu
引用	年報新人文文学(17)：68-105
発行日	2020-12-25

北駕文庫蔵『道神足無極變化経』 卷第四

— 影印および解題 —

徳永 良次

はじめに

今回紹介する『道神足無極變化経 卷第四』一帖は、学校法人北海学園の『北駕文庫』が所蔵する、十二世紀後半に南宋の中国で印刷された、いわゆる「開元寺版」とされる宋版一切経の一部である。筆者は以前、大正三年刊行の北駕文庫の蔵書目録^{〔行啓 紀念〕}北駕文庫蔵書畧目録（第一卷）に「宋版一切経ノ内」とあるのを見つけ、原本調査し概略を紹介したことがある^{〔1〕}。しかしながら、論文では多くの『北駕文庫』の蔵書（宗教書）を紹介する中での一部分であつたため、簡略に過ぎるきらいがあつた。

そこで、今回、所蔵する学校法人北海学園や『北駕文庫』資料室、北海学園大学附属図書館のご協力を得て、あらためて原本調査する機会を得、さらには原本の撮影と影印ならびに解題の許可をいただいたので、画像を掲載するとともに現段階での調査の範囲で書誌情報を中心に紹介しようと思う。

一 書誌

道神足無極變化經 卷第四 一帖

1 刊行年 中国宋時代靖康元（1126）年刊

2 装丁 折本装

3 表紙 後補表紙、格子刷毛目渋引金切箔散し、縦28.3cm 横10.9cm

4 紙数 全十紙、二十九折、墨界線（天地横界）界高約22.4cm

5 題・印造印

外題 ナシ 登録シール「宗教／365」 欄外「北駕文庫」

内題 道神足無極變化經卷第四 被

尾題 道神足無極變化經卷第四 被

印造印「張 元印造」

6 本文 一紙あたり半面六行、一行十七字、全三十六行、三折

7 書入 ナシ、但し第十紙裏に墨書「二」とあり

8 印記

第一紙界線上部「北駕／文庫」単廓朱方印

第一紙裏 「北駕／文庫」単廓朱方印

同 「明治卅四年／八月／臨御仍建／文庫傳光／榮於無窮」單廓朱方印

福州管内衆緣就開元禪寺雕造毗盧大藏經印板一副計五百餘函恭為

今上皇帝祝延聖壽内外臣僚同資祿位都曾百顏徽曾緒陶穀張嗣林撝芳林昭

劉居中蔡康國陳詢蔡俊臣劉漸陳靖謝忠前管勾沙門本悟見管勾沙門僧仔

證會前住持本明見住持淨慧大師法超當山三殿大王大聖泗洲時靖康元年二月 日 謹題

10 体裁 (法量、版心、刻工名等)

表紙 格子刷毛目洪引金切箔散し、縦28・3 cm 横10・9 cm

※ 以下、縦の寸法は各紙ほぼ同一のため省略

第一紙	横65・3 cm	(版心)	被	神足四卷	二	鄭才	高選
第二紙	横65・0 cm	(版心)	被	神足四卷	二	鄭才	高選
第三紙	横65・6 cm	(版心)	被	神足四卷	三	林郷	
第四紙	横65・4 cm	(版心)	被	神足四卷		林遠	
第五紙	横65・4 cm	(版心)	被	神足四卷	五	林宗	
第六紙	横65・3 cm	(版心)	被	神足四卷	六	丁宥	
第七紙	横65・3 cm	(版心)	被	神足四卷	七	鄭習	
第八紙	横65・3 cm	(版心)	被	神足四卷	八	蔡有	
第九紙	横65・4 cm	(版心)	被	神足四卷	九	陳徳	

11 その他

帙（後補）

題賤「道神足無^{（マ）}変化經 卷第四」

帙内側

登録印「北駕文庫／宗教／365」単廓墨方印

鉛筆書入レ「宗 240 p8 宋版一切經ノ内」

12 書誌解説

本資料は、現在では帙に収められているが、これは比較的最近のことで、それ以前は、筆者の知る限り、『北駕文庫』の書架にそのまま配架されていた。状態は、十二世紀の印刷本としては非常に良く、虫損はそれなりにあるものの、当初の折本装の状態が保たれている。ただし、表紙は原装から後補の表紙に代えられている。その時期は不明であるが、使われた表紙の体裁から見て江戸時代のいずれかの時期と思われる。

また、裏打ち補修が少なくとも二回は行われている。しかし、その補修は元の裏打ち紙を取り払うことなく、その上から補修している。裏打ちされた時期も明確ではないものの、第一回補修にとどまる虫損、第二回補修にとどまる虫損、それらを超えた虫損、と三段階があることから推定して江戸時代中期以降に実施されたのではなからうか。

巻末の第十紙裏に墨書「二」と読める文字が記載される（後掲影印巻末参照）。これは現在では裏打ち紙に隠されているので、第二回補修以前（あるいは同時期）に書かれたものと思われるが、

その「二」が何を意味するかは不明である。

各紙の版心には、原則として千字文「被」の箱番号、略経名、紙数、刻工名が刻まれるが、第一紙には刻工名のみであつて、第四紙は紙数がない。各紙長約65cmで共通するが、第十紙のみ約22cmと短い。これは元はくるみ表紙として使われていたものを、現状は別の表紙に代えられたからである。開元寺版の一切経には、「施財刊記」と言われる開版事業に対する費用の寄進をした内容や人物名が刻まれていることがあるが、本書には見られない。

二 解題

二― 北駕文庫について

北駕文庫（ほくがぶんこ）は、明治四十四年、当時の皇太子（後の大正天皇）による北海道行啓を記念して、北海中学校の校長浅羽靖（あさばしずか）が設立した。浅羽靖によるその設立趣意概要には以下のように記述される^②。傍線は筆者による。

當北駕文庫ハ明治四十四年八月

皇太子殿下

我私立北海中学校ニ行啓ノ紀念トシテ微力ヲ顧ミス創立シタルモノニシテ且ツ北海道ハ我帝國紀元以

來殆ンド三千年ニ垂ントスル古帝國北疆ノ一部分ナリト雖トモ人文未タ進マス從ツテ太タ國書ニ乏シク自カラ人民ノ性情ニ純厚ナラサルモノアリ多年ノ痛恨事トス此ヲ以テ先ツ我國ノ書類ヲ備フルヲ急トシ現代ノ科學ニ属スルモノハ漸ヲ期セントス但藏書ハ火災豫防ニ專ラ心ヲ用ヒ其他ノ設備ニ至ツテハ惣テ質素節約ニ從フ

明治四十四年八月

私立 北駕文庫主 浅羽 靖

このように、浅羽靖は圖書の充実、特に「國書」を第一に収集することに努め、購入はもとより自身所有の圖書を始め、友人、知己に圖書の寄贈を呼びかけた結果、文庫設立当初にはおよそ一万五千冊に達した。その後、江戸時代以前の本版本が今後入手困難になることを知り、その蒐集に力を注いだようである。また、さらに多くの寄贈を国内外の関係者に募った結果、大正三年に印刷発行された「行啓北駕文庫藏書畧目錄（第一卷）」には、約三万一千冊（外国書、雜誌類含まず）と倍增した。

今回紹介する、『道神足無極變化經卷第四』一帖もこのような収集過程のいずれかの段階で北駕文庫に収蔵されることとなったのである。ただ、現状ではどのような経緯でこの一帖だけが『北駕文庫』にもたらされたのかについては明らかになっていない。今後、残された記録類の調査が進められていくことで、本書の収蔵過程が解明されることを期待したい。

二―二 『道神足無極變化經』について

本資料の内容は『仏書解説大辞典』(第八巻 248頁)に以下のように記載されている。

本経は、仏、忉利天に於てその母を教化せられしことを記し、雜阿含經十九・三。增一阿含三六・五、(中略)等を背景として現はれたもので、其等が母后を肉体的な母とするのに対し、本経は精神的な即ち般若波羅蜜を仏の生母とし、斯くて大乘經觀の立場に於ける菩薩行とその神変を説くものにして仏昇忉利天為母說法經の異訳である。唯それに附加せらるゝ点は、月氏天子の問答後に、仏が忉利天・舍衛城・毘舍離城・波羅奈城で同時說法せらるゝ神変不思議に目連が奇異を感じ、仏前に偈を以て是れを讃ずることのみである。

本来は、宋版一切經においては四巻で右のような内容の仏典としてまとまっているのであるが、『北駕文庫』には最終巻の巻四の一帖のみが所蔵される。宋版一切經は「天地玄黄」で始まる千字文が付された経箱に収蔵するのが一般的であつて、本書の内題などに記される「被」は千字文の百三十八番目「化被草木」(傍線筆者)の「被」に該当する箱の番号である。

この番号は、現存する宋版一切經において比較してみると、東禪寺版(一部開元寺版を含む)の醍醐寺蔵の記載と一致する⁽³⁾。つまり、醍醐寺蔵宋版一切經の第百三十八函もやはり「被」函であり、そこには『道神足無極變化經卷』を始め、『仏昇忉利天為母說法經』三巻も収納されており、先の『仏書解説大辞典』の解説通り、両者は関連ある經典であり、同一の経箱に収蔵するのが一般的なのであろう。

次に、本資料は、開元寺版の宋版一切経であるが、そもそも一切経とは何か、また、宋版一切経の種類と日本にもたらされた時期や数、現存する寺院とその状態など、それに関連した事項について煩を厭わず紹介する。

二―三 一切経

一切経とは、経・律・論の仏典に中国成立の仏典注釈書も加えて一定の秩序により構成されたものであるとされる⁽⁴⁾。それも中国では八世紀に『開元釈教録』(二千七十六部、五千四十八卷)がコレクションされ、後に『貞元新定釈教目録』(二千二百五十八部、五千三百九十卷)が作成された。以後、これらの目録によって一切経が作成され、中国に限らず、日本でも書写事業が行われた。しかしながら、現存の目録や一切経と呼ばれるコレクションに含まれる經典の点数は必ずしも一定していないようである⁽⁵⁾。

二―四 宋版一切経

当初、一切経は書写されて来たが、中国では宋代(一部、元代に入っても続く)に入り、都合五度の一切経の開版が行われた。これらを宋版一切経と呼んでいる。以下、それぞれの宋版一切経について、特徴や通称、巻数などについて概観していく⁽⁶⁾。

1. 蜀版（開宝藏） 972—977年

六六二〇余卷

中国では十世紀北宋時代に皇帝太宗により勅版一切経が完成し、これ以降、書写ではない印刷による一切経が数度に渡って作成されてきた。この初めのものは雕造された土地の名をつけて「蜀版一切経」という。この蜀版は卷子本の体裁を取っている。

2. 東禪寺版（崇寧藏） 1080—1112年 六一〇八帖

十一世紀後半に福州閩県の東禪等覺院で上梓されたため東禪等覺院版（後に東禪寺）または「福州版」とも称される。東禪寺版以降は、折本装となっており、表紙は紺色の帙表紙、金字で表題・千字文を記す。折目の版心に略経名、巻次、丁数、刻工名が刻まれる。

3. 開元寺版（毘盧藏） 1112—1151年 六一三二帖

東禪寺版と同じ福州閩県の開元寺で開版。開元寺の歴代住持が勸進僧となり助縁を募ったため、巻末に施財刊記が刻まれていることが多いのが、東禪寺版との違いのひとつである。

日本に現存する宋版一切経の福州版は東禪寺版と開元寺版の混合であるとされる。

4. 思溪版（円覚藏） 1126—1132年 五四八〇帖（後、四五〇帖増補）

十二世紀に王永従一族の菩提所として創建された思溪円覚院において雕造された。一族により開版されたため施財刊記がなく、版心が紙の継ぎ目のため見えないのが思溪版の特徴である。また、表紙は黄表紙に墨書で題、千字文を記載する。

5. 碩砂版 1216—1272年

六三六二帖

十三世紀の南宋・蘇州の碩砂延聖院で雕造された。しかし、途中延聖院の罹災などにより中断しつつ、十四世紀、元代になって追雕が実施されて完成した。体裁は折本装であることに変わりないが、表紙は茶・赤褐色となっている。

以上の通り、中国宋時代には五度にわたり一切経の開版事業があり、中国国内はもとより周辺の朝鮮・日本などに多く輸入され、独自に雕造が行われるなど大きな影響を与えた。これ以外にも、単独で雕造された別種版の存在も知られている。体裁も当初の卷子装から折本装に変更され、表紙の色・形式もそれぞれ特徴がある。また、一切経と言っても、思溪版の約五九〇〇巻から蜀版の約六六〇〇巻まで大きく異なっている。

二一五 日本における宋版一切経の輸入

日本に始めて宋版一切経が輸入されたのは、平安時代末期の鳥羽殿経蔵の福州版であるとされる。その後、鎌倉時代には多数の宋版一切経がもたらされ、畿内はもとより東北、関東から九州に至る全国各地の寺社に納められたようである。その総数は、五十蔵以上、確実なものに絞れば四十三蔵にのぼった⁽⁷⁾。例えば、京都・栴尾高山寺にも、宋版一切経が施入されている。鎌倉時代建長年間書写とされる『高山寺聖教目録』には、次のように記される。

(二才)

高山寺聖教目録

一切經二部之内

一部唐本 納西經藏

刑部入道渡進

(傍線筆者)

一部納 東經藏

宰相僧都眞遍之進

右の傍線で示した、「唐本」とあるのが、宋版一切經であり福州版であることが推定されている。一方、東經藏の一切經は宰相僧都眞遍寄進の書写本であつたとする⁽⁸⁾。

さらに、近時、愛知県知多郡の岩屋寺所藏の思溪版一切經が、少なくとも十三世紀後半から十四世紀中頃までは、高山寺にまとまつた形で所藏されていたことも明らかとなつた。つまり、高山寺のようなそれほど規模の大きくない寺院にも、ある時期三藏もの一切經(内、二藏は宋版)があつたこととなり、当時における一切經、とりわけ最新の宋版一切經の輸入が隆盛であつたことが知られるのである⁽⁹⁾。

二一六 現存宋版一切經と本資料との關係

今回紹介する『道神足無極變化經卷第四』は、刊記が「福州管内衆縁就開元禪寺雕造毘盧大藏經」に始まり「靖康元年」とあることから開元寺版であることは明らかである。刻工名も先行研究で明らかにされている名称とほぼ一致する⁽¹⁰⁾。

前節で紹介したとおり、これまでに五十藏以上、少なくとも四十三藏が日本に請来されているが、日

本に現存する宋版一切経は、先行研究によると以下の通りである⁽¹¹⁾。

- | | | | |
|----|-----------|---------------------------------------|-------|
| 1 | 中尊寺(岩手) | 開元寺版(東禪寺版・思溪版混合) | 約二一〇帖 |
| 2 | 最勝王寺(茨城) | 思溪版(東禪寺版・開元寺版混合・天海版三四〇) | 五五三五帖 |
| 3 | 喜多院(埼玉) | 思溪版(碩砂版三九・元普寧寺版一七八九・南宋補写三三・江戸写本一四四混合) | 四六八六帖 |
| 4 | 増上寺(東京) | 思溪版 | 五三五六帖 |
| | | ※もと菅山寺(滋賀)にあったが、慶長一八年(1613)に移される。 | |
| | | なお、一帖のみ菅山寺に思溪版が現存。 | |
| 5 | 称名寺(神奈川) | 東禪寺版・開元寺版混合 | 三二三六帖 |
| 6 | 岩屋寺(愛知) | 思溪版(和版一一〇・写本一九五) | 五四六三帖 |
| | | ※もと高山寺、宝徳三年(1451)、岩屋寺に移される。 | |
| 7 | 本源寺(愛知) | 東禪寺版一八六一・開元寺版二五五・思溪版五四・和版等混合 | 二二三九帖 |
| 8 | 長瀧寺(岐阜) | 思溪版 | 三七五二帖 |
| 9 | 教王護国寺(京都) | 東禪寺版(開元寺版五五七・和版七・写本一八帖混合) | 六〇八七帖 |
| 10 | 醍醐寺(京都) | 東禪寺版(大般若経六五五帖は開元寺版混合) | 六〇九六帖 |
| 11 | 知恩院(京都) | 開元寺版(東禪寺版九七八・江戸写本五一帖混合) | 五九六九帖 |
| 12 | 南禅寺(京都) | 宋版(東禪寺・開元寺)・元普寧寺版・高麗版・和版混合 | 五八二三帖 |

- 13 興福寺（奈良）
思溪版・碩砂版・祥符寺版混合 四三五四帖
- 14 唐招提寺（奈良）
思溪版四三〇・碩砂版一〇二・南宋單刻八三・和版二〇混合
四四九四帖（和版五部大乘經二六九帖含む）
- 15 長谷寺（奈良）
思溪版二二二・写經四五七・和版八七 二七六六帖
※もと久米田寺、のち明応六年（1497）に長谷寺に移される。
- 16 西大寺（奈良）
思溪版五九八・碩砂版五九六・南宋單刻二帖
※元版一切経も現存し、東禪寺版一三帖・思溪版九八帖・碩砂版一帖が混合
- 17 金剛峯寺（和歌山）
東禪寺版（思溪版四四三・和版二〇・日本補写一帖） 三七五〇帖
- 18 宮内庁書陵部（東京）
東禪寺版・開元寺版混合・補写 六二六四帖
※もと法華山寺、のち石清水八幡宮

右にあげた一覧が、まとまった分量として日本に現存する宋版一切経である。その中で、本学所蔵の『道神足無極變化經』と同じ開元寺版が含まれている一切経は、順に2、5、7、10、11、12、18（醍醐寺蔵本は除く）であって、全体から見ると現存する寺院はそれほど多くはない。また、もともと四十三蔵以上請来された宋版一切経が、長い歴史の中で、罹災や戦乱、自然災害等を経て、結果的に十八に減じているので、現状では本学『北駕文庫』所蔵の資料の伝来について確実な手掛かりはない。あるいは、これ以外の宋版一切経のコレクションに由来するかも知れないし、そもそも日本国内に限らず、東アジアに宋版一切経が流布していたことなどを考えれば、本資料の伝来については、『北駕文庫』内の蔵書収集

過程の更なる調査と国内外における宋版一切経について検討しなければならない。

以上、繁閑整わず未解明の部分も多い。本稿の主眼は本学『北駕文庫』所蔵の資料紹介であり、本資料の来歴に関する事項などは、これ以上の検討材料に乏しいため他日を期したい。

〔注〕

1. 徳永良次「北駕文庫蔵書目録稿 ―「宗教書之部」の古写本・古刊本（一）―」（『北海学園大学人文論集』第4号、1995年）
2. 北駕文庫『行啓／記念北駕文庫蔵書畧目録（第一巻）』見開き、浅羽靖の設立趣意による。
また、『北駕文庫』を知るには、以下の文献も有用であり、本稿でも参考にさせていただいた。
和泉田正宏「北駕文庫研究序説（上）」（『北の文庫』第26号、北の文庫の会、平成十年）
中嶋健一『北海学園の父 浅羽靖』（非売品、学校法人北海学園、昭和四十四年）
3. 総本山醍醐寺『醍醐寺蔵宋版一切経目録』（総本山醍醐寺、汲古書院、2015）
4. 大塚紀弘「宋版一切経の輸入と受容」（『鎌倉遺文研究第25号』、吉川弘文館、2010年）
5. 沼本克明「高山寺の一切経と請来版経」（平成二十一年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集」、平成22年）
6. （財）元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第四輯之一 宋版一切経』（総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、2011年）を元に適宜、山本信吉『古典籍が語る ―書物の文化史―』（八木書店、2004年）、注4の大塚紀弘2010などを参考に改変した。
7. 注4、49頁
8. 注5 沼本論文。17頁。なお、『高山寺聖教目録』が建長年間書写とされる根拠については、包紙の記述によっている。

しかし、その書かれた時期や人物については必ずしも明らかになったとはいえない。従って、正確な書写年代は

現状では鎌倉時代中期頃とするのが妥当だと思う。

また、次の論文も高山寺と宋版一切経との関係を知る上で大いに有益である。

- 大塚紀弘「高山寺の明恵集団と宋人」〔東京大学史料編纂所研究紀要第20号〕、2010年
 9. 上杉智英「岩屋寺藏思溪版大藏経の来歴」〔印度学仏教学研究第67巻第2号、日本印度学仏教学会、2018年〕
 10. 野沢佳美「宋版大藏経と刻工 ―附・宋版三大藏経刻工一覽(稿)―」〔立正大学文学部論叢〕110号、平成11年
- ただし、野沢論文では「陳得」とあるが、本資料では「陳徳」とし、「林遠」がないなど、わずかながら刻工名に差異が見られる。
11. 注6に同じ。なお、数帖のみの現存や単刻の宋版を有する寺院等は除外した。

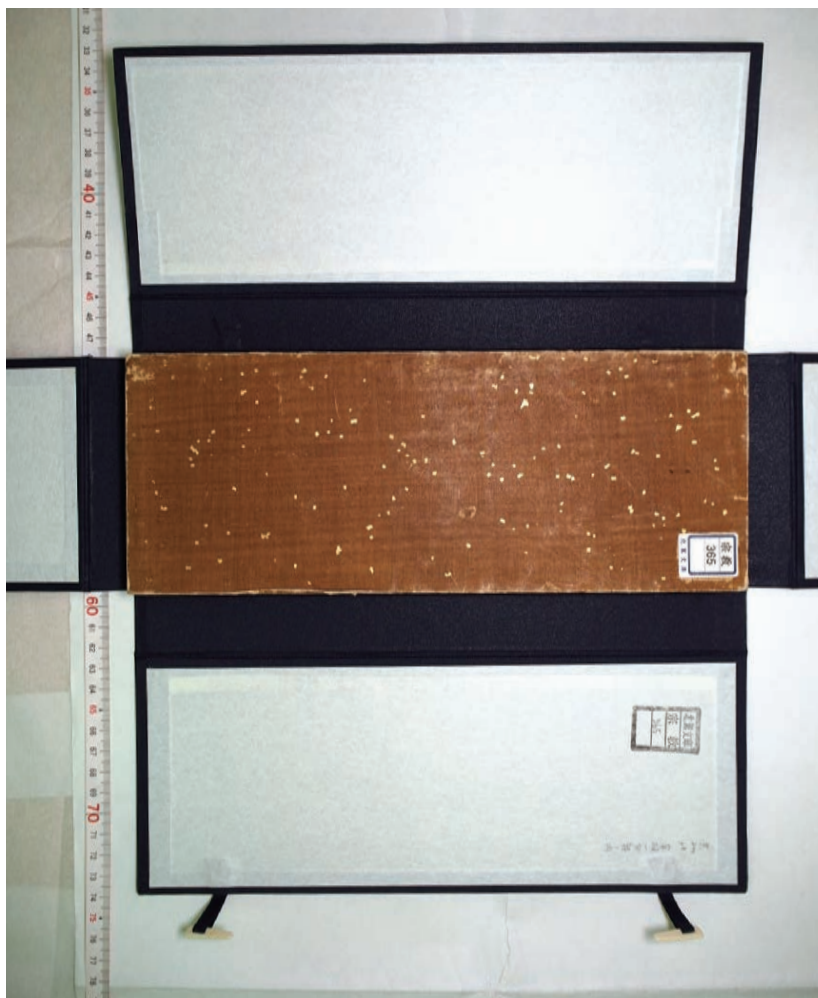
三 影印

凡例

- 1 撮影は短時間・単独の限られた条件で行ない、資料保存を最優先としたため折本装の折のゆがみなどがそのままとなっている箇所がある。
- 2 一画像あたり、三面を基本とする。ただし、前の連続する部分を1行程度残してある。
- 3 紙の継目部分の欄外に「第1紙」などと示す。
- 4 末尾に、現在の所蔵印と裏書も掲載する。

(とくなが よしつぐ・北海学園大学人文学部教授)

帙内側・表紙



表紙



道神足無極變化經卷第四

西晉安息三藏安法欽譯

被

稱微密深難問難解凡屬般若經則計五部略為
今古章句甚多以其係佛經故每章須微密證釋依體揀擇
劉常泰唐蘭陳澧卷各組釋經詳盡則卷句詞本惟最精妙門傳件
證會前持表明見持釋法師釋經出要玄義附詳疏卷至月日謹題

復次自連於是三千大千剎土東南方去是

剎八万四千四天下國土名三慢陀質_{晉言}

其佛名質多拘蟲怛薩阿竭阿羅訶三耶三

佛_{幻言}如來無所著等正覺現在說法彼四

天下世界盡甚好東西南北十八街巷珍寶

滿地柔輦譬如天衣地生柔輦之草高四寸

其地所有各各異種衆色如是皆悉徧行去

若下足踏地草皆柔輦可意足舉則生如故

其地皆平如掌自連是徧等世界皆如此有

城名毘陀鬱沉_音其城中人安隱豐饒熾

盛大樂東西長三十二俞旬南北廣十二俞

旬如是目連彼善尊城人皆共居其中其國

人民繁衆而多於耆迦摩竭拘留諸人民數如

是司連其幻華如天甘露人壽壽成中生子

人民饑寒間多於焉迦摩竭拘留諸人民數如
是目連其幻華如來世尊於喜尊城中遊行
止頓其中一會說法為師子吼令三十那術
人皆得阿羅漢復有三十那術人得阿那含
復有三十那術人得斯陀含復有三十那術
人得須陀洹復有三十那術人發辟支佛行
復倍不可計數人發阿耨多羅三藐三菩提
復異不可計數人皆悉作功德目連是彼四
天下世界有樹名末頭三披此樹言譬如蜜其
華菓實常有不乏其華菓實味譬如百味飲
食彼若男子母人欲得一華一菓得以食之
安隱飽滿七日不飢不羸色貌不減身體康
強輕便有氣力食是已訖如服甘露亦無小
便亦不大行亦無涕唾彼無田種植者無舉
假償責者其國中皆共食是華菓彼國初不
知有貧富俱等無異彼世界如來自蓮有九
十六億那術百千弟子眾其喜薩眾復倍於
弟子有國名三曼陀拘蟲音有雜果諸弟
子眾食飲常在此園中坐其弟子喜薩眾

子衆食飲常是在國中坐其子衆善薩衆
 皆坐樹下若欲食時橋自然動搖華葉不墮還
 皆在鉢中食飲飽訖樹不動搖華葉不墮還
 如本故如自連微世界所有事物過倍於
 是不可計自連彼世界如來則我身是我於
 彼世界以法而教導如是自連名爲如來道
 神足無極之變化也一切諸弟子緣一覺所
 不及知復吹目連於是三千大千刹土西南
 方去是四天下世界七万四天下世界其世
 界名比寶甕填晉言有八万國王一天下
 有八万城城外有八万聚落八万王所治處
 八万城八万四千小城一處城聚落處城
 小城拘利百千皆滿其中彼諸王皆奉行法
 非法之事皆悉除盡是諸王各有八万四千
 夫人嫁女亦時嫁女端正世之最上一諸
 王各有五百太子一諸王各有万二千女
 是万二千女皆端正於世最上是諸王法無
 鞭杖亦無兵器是諸王各自在治其國自
 連彼容受世界佛号波勿多羅陀那賴比恒

連彼容受世界佛号波勿安羅陀那賴比怛
 薩阿竭阿羅訶三耶三佛放言如來無所
 者等正覺現在說法彼如來自連得阿耨多
 羅三耶三菩提時於彼四天下踊在虛空中去
 地七仞結加趺坐一加趺坐放大光明彼時
 四天下世界皆悉相見雨於天華諸音樂器
 不鼓自鳴一一樂器出百千音設地爲六段
 震動諸伎音樂譬如梵音聲不可計百千所
 作功德所致轉於法輪一切諸欲垢皆悉盡
 無餘泥垢持喜塵所知爲衆說法彼如來說
 法以是四天下世界八万諸王及夫人婁女
 諸子諸女見佛變化已乃皆發阿耨多羅三
 耶三菩提心彼國中一切人民男子女人男兒
 女兒皆遠塵離垢諸法眼生是諸王及夫人
 婁女諸兒諸女從佛求作沙門是時如來皆
 悉聽爲沙門爲沙門已在此所處在所處及
 城郭縣邑聚落其所至到處皆步行不乘車
 馬卧起飲食常於寺舍不復田作種植皆食
 自然天人來下而悉供養是時如來再會說

第3紙

自然天人來下而悉供養是時迦琅再會說
 法時一切諸弟子行者皆得斯陀含喜薩行
 者皆得歡喜忍三會說法時一切人皆得阿
 那含喜薩行者皆建得五通四會說法時一
 切皆得阿羅漢喜薩行者皆得起法忍夫
 人婢女男女皆得起法忍公時夫人婢女
 及諸女皆轉女人身悉得男子不復見女像
 時彼如來皆授使爲阿耨多羅三耶三菩提
 目連意云何乃知彼土寶放光明如來無所
 著等正覺不自連言不及天中天佛言則我
 身是名爲如來道神足無極之變化也是故
 目連一切弟子緣一覺所不能及知也
 復次目連於是三千大千刹土西北方去是
 五万五千四天下世界其世界名提督提督
 氣世界純以洿動迦抄羅稱檀其稱檀大如
 一錢者價當是世彼世界有樹三曼陀捷陀
 音言其彼世界一一樹其香四百里其土皆
 生蓮華大如車輪一華者有不可計百千葉
 無央數色其華柔軟如大綰縵華生高二丈

無央數色其華柔輭如大綰綰華生高一丈

許其香徧四天下香甚香彼世界四天下栴

檀爲交露經行處亦皆栴檀波曼華來在兩

邊彼世界無城郭縣邑聚落但有交露帳覆

蓋其上其世界人民食飲譬如第五尼曼羅

天上復次彼放香普熏世界佛号撻陀勿賴

比音音義如來無所著等正覺現在說法

彼如來世界純是菩薩行無有弟子緣一覺

行者其彼世界四天下悉徧滿皆得神足其

菩薩皆得不可思議忍彼菩薩羣中有菩薩

名薩和曇無惟屈羅遊音義一切得不可議

願事已得三忍神通爲達其所報答皆悉過

上供養甚多不可計諸佛復次目連彼一切

法無極積聚善薩自念今欲問佛儻肯說者

而欲問之作是念已便從座起放身一毛

之光明照四百里放身光明徧境界若干百

種華無央數色色甚鮮好是華在於虛空去

地七仞心念欲持是供養應時虛空中聞柔

輭音樂之聲譬如天樂是音樂聲皆出入種

媿欲甚多貪婬瞋恚貪鬧憤強頌諸

根習邪無信嫉妬犯惡多疑弊惡急性懶惰

懈怠喜忘慙無所畏有吾我人壽命無點智

譬如野禽豕獸不知慚羞無有禮節心意癡

狂彼世界醜惡面目無色無所省錄其處土

但有汙泥及諸不淨生活勤苦衣食不充喜

鬧更相罵詈六月一雨一歲再雨五穀不豐

惡行所致其世界地堅如鐵石據據不平譬

如荊棘踰傷人脚毒惡止上及地但生荊棘

彼世界所出水人民飲之濁惡鹹苦臭穢不

淨衣被皆用草葛貧窮困厄更相看視轉相

作使彼世界國王急性常喜瞋恚其中人民

役使作務甚大勤苦治生田作穀粟錢財王

皆奪取鞭杖暴虐無不被殃如是目連其國

界中現世受殃甚劇乃今如是比類彼復倍

過此其世界中人命盡皆墮地獄餓鬼畜生

三惡道中復次目連彼四天下世界如來名

振波迦論真陀摩那迦樓

者等正覺而為說法

如來自連現十八

者等正覺而爲說法。度神足如來目連。現十八
 大變化而爲說法。七百歲說法竟。七百歲無
 有一人解法者。是時甘露亦不厭倦說法。如
 故常持大悲而爲解說。如是目連彼佛甘露
 若至聚落郡國縣邑。若散居恒遊行無一處
 所到其國人民罵言。輕易撓城唾言持怒作
 等。其甘露承誘恤養護欲使度脫得至泥
 洹。目連是時如來於忉利所藏中說法。常養護
 之說法。時有八万四千那由他人皆得阿羅漢
 復八万四千那由人得阿那含。復八万四千
 那由人得斯陀含。復八万四千那由人得須
 陀。洹諸大衆一日之中皆除鬚髮作沙門悉
 受大戒。是時學者不學者於三月中前所諸
 惡從佛受誨皆得離之一時俱般泥洹。彼佛
 恒常在復養護緣一覺及聲聞行者其所作
 罪惡故而生彼國。彼受苦痛乃爾一時皆得
 畢離。於是目連復白佛言。惟甘露是養護聲聞
 作何等罪。生於彼國土。佛告目連。聲聞有四
 事。法住生彼國何等爲四。一者猶聲聞名而

事法住生彼國何等爲四一者猶甚薩名而
求供養不學菩薩事二者自連於菩薩事不
能行而懈怠雖見亦復不能持三者自連菩
薩見餘菩薩得供養便妬嫉之言何以供養
是斷截他人功德而輕易之四者自連菩薩
不能護身口意以是故得是用是事自連得
生彼國自連佛言彼佛則我身是我於彼國
以法教導人名爲如來權道神足無極之變
化也弟子緣一覺所不能及其如是自連
如來於是三千大千世界作佛事如是自連
如波軍不盡悉見所以者何弟子不能及知
以是故不能悉見復次目連於是三千大千
世界自利四天下世界彼如來隨一切意
而爲說法復次有四天下世界如梵天形像
被服而爲說法彼世界如來不出家除鬚髮
復次有如釋提桓因形體被服而爲說法或
如日天王形體被服而爲說法或復如遮迦
越王形體被服而爲說法如是比目連於是
三千大千世界中如二切人之所願而爲說



三千大千世界中如一切人之所願而願欲
 法如是以無央數復有量無央數不可計數
 佛刹土所爲一切弟子緣一覺所不能及知
 譬如目連月宮殿日宮殿日月天各坐其殿
 亦復不出亦復不惟坐照見天下如是目連
 佛世尊亦不從是起亦不到彼坐悉見不可
 計佛刹土皆示現隨一切人上中下之所願
 皆養護之而爲說法是賢者大目犍連白佛
 言何所審是佛世尊者若忉利天若閻浮利
 若天宮若三千世界此彼四天下世界復異
 世界說法乃余所世界何所審是佛者我曹
 當云何知無極大觀之義大衆之服云何得
 知目連所問如是世尊佛告大目犍連言如
 汝所問能受持不今爲汝說之目連譬如幻
 師化作人若男子若女人何所審是男女者
 自連白佛言無有審是者何以故是幻呪術
 力之所成於是無有持佛誣目連是幻誰之
 所化是幻能所作耶目連白佛言可作世尊
 佛誣目連如是一切諸法如幻化而無持在

佛語目連如是一切諸法如幻化而無持在
所作爲如是目連幻師所化術力所成化幻
多有所作爲是幻皆等無有持如是目連如
來以智慧一切諸刹而等示現如是皆悉無
持爲一切所作而常等如是爲佛事以是故
爲大無極達觀如是等所爲之大報如目連
諸佛世尊皆一等無若干如是比目連諸法
常等住如諸法等修成道亦余法是而無持
亦不若干目連波熟思惟如來於廣遠誦尋
跡求佛能化作恒邊沙如來三十二相一等
無異亦能令說法六十衆事所說同聲是諸
如來悉皆知一切人心之所行是諸如來皆
悉知一切人當得解脫者如解脫印印六情
根而爲說法令稍稍得滿智是諸如來爲一
切現說法以一切聞之皆奉行等知諸苦習
盡是諸如來有三事變化說法爲四面等說
法是諸如來悉現諸佛事於目連意云何乃
余所諸佛何所審是最特者如來幻幻如來
何者爲特目連白淨言於是中如來無有難

第7紙

何者爲特目連白佛言於是中如來無有能
得知特者何以故如恒薩如恒薩作而無
增減於恒薩無若干作若色若修若報若
慧若神足若說法若脫一切人如是如來於
是衆事不能若干說如是目連所作如是作
如是見如化幻分諸法亦爾是故諸法無有
特無若干如此目連化幻分諸法亦爾凡
人於以不能作若干乃說諸佛甘尊何以故
目連一切諸法習於空故念猷不用欲不欲
若有若無即任其中能所作如所得於法界
亦不起亦不滅目連如法界如來皆見皆知
皆覺如是目連如令閻浮利地人滿其中如
來示現示現變化名作如來若作比丘僧其
人展轉不自知爲如來若比丘僧是閻浮
利中人目連滿是四天下若天人及蜎蜎
蠕動之類諸可所生者目連亦所人皆任佛
前不久遠前世是一切皆住於佛前皆現
如來若比丘展轉不相知復置是四天下目
連於是三千大千刹土中一切蜎蜎蠕動之

連於是三千大千刹土中一切蝸蜚蠕動之
類滿其中皆令得人身得人身已皆令一等
如是自連得人身得人身已皆一種類皆現
如來比丘僧展轉不相知自連復置是三千
大千刹土人民如是自連東方恒邊沙刹土
東方南方西方北方四維上方下方如是十
方一切諸世界最爲甚多不可計數都普一
切皆令得人身得人身已如是入輩巨
連如來一種類一皆使如來皆復作比
丘僧如是輩展轉復不能自知復置自連十
方十恒邊沙佛刹中自連如來今坐於是
持佛眼視諸佛刹中持佛所知譬如星數於
大千劫說不能究竟如是不可計佛刹於是
間坐見乃今所佛刹如恒薩阿竭慧覺所
說令一切皆如辟支佛索不能知不能數不
能稱不能視辟支佛常皆不能知何況弟子
以是故如來皆見知如是百如是千如是百
千如是拘利百千如是恒迦羅如是頻伽如
是阿壽如是阿僧祇如是不可計數如是恒

是阿耨如是阿僧祇如是不可計數如是恒
 邊沙如是三千大千不可計數國皆悉徧滿
 中如是目連佛言如是數無所罣礙眼所見
 直一而視而不睥睨視亦不延頸視持佛眼
 一而視遍悉見十方不可計無央數難思議
 無邊無際刹土中如是比较佛刹土其中人
 民及蛸蜚蠕動之類如是如是比一切薩婆
 薩之界多於地上之分如是薩婆薩前世初
 未曾有行皆令得人身已皆使作遮迦越王
 一一遮迦越王各各坐有官屬一遮迦越王
 者其官屬都盧皆如今所遮迦越王展轉如
 是如是目連都盧今所遮迦越王官屬為一
 遮迦越王官屬如此數如是比皆為如來其
 像色貌皆一種類如是因緣一切皆住在前
 一一遮迦越王及其官屬在前皆各自見有
 如來諸比丘僧諸遮迦越王各自呼獨有如
 來謂其餘皆無各各皆悉各自見一如來
 謂餘為無各各皆悉亦如是諸遮迦越王及
 其官屬身一一諸毛皆各一如來一如來皆

其官屬身一諸毛皆各一如來一如來皆
各有比丘僧如是皆是如來道神足無極之
變化其聞是者不敢微意言非是如來無極
示現之變化也若有起念是真為如來無極
示現變化之所為如是為不可計慧所為事
目連如是於目連意云何如我今乃今所人
皆立之於遮迦越王處如是品福分如是品
福分皆使得作遮迦越王七寶皆具如是福
分寧多不自連白佛言甚多甚多天中天使
一人得者其福無能計量乃今所人不可計
不可限甚多安過之安佛言目連如是所說
當受持熟思惟之如是諸薩想薩作遮迦越
王所福分如是福分甚多不如如來一毛之
福出過是上無央數於是目連白佛言如是
為是如來之德是為如來為大神足為大分
為大能如是世尊我悔無所及何以故於諸
法神通達而自損自連白佛言彼諸一切聞
是如來道神足無極之大變化皆遠得大德
其有聞已發一心念其中事欲求解脫欲擊



其有聞已發一心念其中事欲求解盼欲學
 達滴欲得是道神足無極之變化者為發阿
 耨多羅三藐三菩提心世尊如此輩人當頭面
 禮之所有者何如是人得不久是輩終不復
 畏墮三惡道亦不復疑如是如是義亦不願
 天龍鬼神捷智起亦不願作梵天如是世尊
 目連於是聞道神足無極變化起住叉手發
 聲言南無佛世尊當為聞是輩人作禮令是
 人疾速所願欲發者已發者皆令是輩人逮
 得無極如佛無極令心於是復轉不猶豫
 不復疑信今時諸天龍闍叉捷智起釋梵護
 持世者供養於佛以及於法言皆悉願樂是
 時百千種諸音樂器不鼓而自鳴天慢鈴羅
 波雲拘文勢陀利華滿於忉利天上聞是法
 言品所說時七万二千那術諸天從本來作
 功德皆發阿耨多羅三藐三菩提心皆說是言
 我曹於後當來世當在諸天及世間人前作
 大師子吼如今日佛世尊師子之吼令時月
 天子月星天子前白佛言世尊是族姓子族

天子月星天子前白佛言世尊是族姓子族
姓世於是法言品所說若受若持若念若說
於大眾中普廣說之當得幾所福祐功德佛
語天子於是三寶若族姓子族姓女不斷不
忘求達以於是法言若自持爲他人說何以
故如天子聞是法亦不於弟子心有所求亦
不於辟支佛心有所求心常在阿耨多羅三
耶三藐何以故持淨解脫天子得利誦根於
是法言爲達爲起道起歡喜心於解脫而不
疑天子當持是法言而廣說之不斷三寶而
得住於是法言若持若諷誦若爲人說於天
子意云何不不斷三寶而常住若有於是法言若
持若說於天子云何不不斷於三寶而住供養
於千佛衣被飲食牀卧具病瘦醫藥所當得
於百千劫中寧有能計是人所功德者不無
有能知者世尊佛言如是天子於是所說法
言有智者知是福不可計無有限量若有
於是法言若持於衆中說其福過是無能計
者於是說勸白佛言世尊是法言名爲何等



第1紙裏 印記2種



